

世界の楽器「尺八」

美しい中世の面影を残す東ヨーロッパの古都ブラハ市のブラハ城に真下にある名門音楽大学(HAMU)の校内で、ここ数年、毎夏、尺八の音が響き渡るフェスティバルが開かれている。このフェスティバルは、四日間の合宿型教育／芸術プログラムによって行われ、ヨーロッパ各国から参加者が集ってくる。講師陣は、地元やヨーロッパの尺八指導者、日本から招聘された尺八指導者、及び日本音楽の専門家たちからなる。昼間は集中的なワークショップおよび日本文化と尺八に関する講義があり、夜は古典本曲(本来尺八の瞑想性のある独奏、三曲(箏・三味線と合奏曲)、現代邦楽、前衛作品等の演奏と、尺八音楽の幅広い範囲を網羅しているフェスティバルである。昔からクラシック音楽の中心地として知られているブラハの街を今歩けば、日本の尺八の音が聞こえてくるのである。

実はこのような風景は最近珍しくない。尺八の国際化は60年代から始まったが、この二十一年間にだいぶ本格的になってきた。その発端は1994年に、武満徹の「ノヴェンバー・ステップス」の演奏で知られた故・横山勝也のもとで岡山県、美星町で行なわれた第一回の国際尺八フェスティバルであった。引き続いて1998年には、コロラド州ボルダー市で初めての大規模な海外日本音楽イベントとして尺八フェスティバルが開催され、ロッキーマウンテンの元で世界中からおよそ三百人の尺八オタクが吹き集った。後にニューヨーク市(2004年)とシドニー市(2008年)でも尺八フェスティバルが開催され、全世界の尺八人口を増やす引き金となった。なお、来年は京都で尺八国際フェスティバルが予定されている。

これらのフェスティバルの共通点は、流派を超えた立場で参加者が尺八や日本の文化に多角的かつ客観的なアプローチをしながら、様々な国の人々と相互に交流できる機会であることだ。「世界の楽器」となってきた尺八だが、残念ながら日本ではその意識はまだ低いようである。

Photo:岩佐英一郎

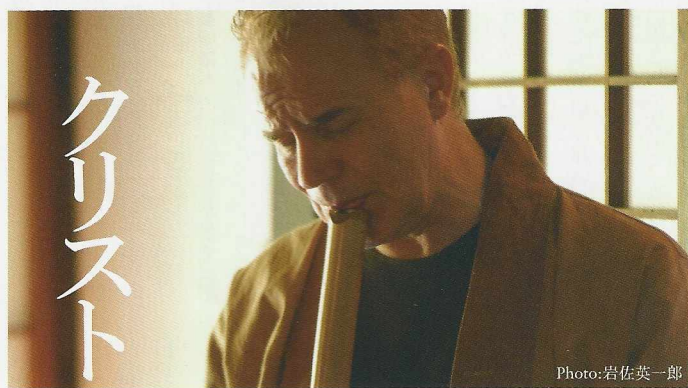


Photo:岩佐英一郎

クリスト

ファー遙盟



ブラハのワークショップ



ブラハ音楽大学の前

クリストファー遙盟

尺八奏者、執筆家。アメリカ生まれ、1972年に来日。人間国宝故山口五郎師に師事し、東京芸術大学大学院を修了、全世界演奏活動を行う。
CDは多数、著書は「尺八オデッセイ一天の音色に魅せられて」(蓮如賞受賞作品、河出書房新社出版、2000年)など。
ボルダーとシドニー国際尺八フェスティバルの実行委員。「ブラハ尺八フェスティバル」のシニアー・アドバイザー。
現在、国際文化会館芸術監督、テンブル大学講師(日本音楽)。合気道三段。

今回は演奏者のきむらみかさんの予定です。

あんさんぶる
編集室より
ensemble

八月のある日曜日、芥川賞の選考会に行った。といつてもこちらは文学の芥川(龍之介)賞ではなく、龍之介の三男芥川也寸志を顕彰してサントリーホールで開催される作曲賞のこと。

主催者のサントリー芸術財団HPを用いると、わが国の新進作曲家のことも清新にして将来性に富むオーケストラ作品を対象に、演奏会形式により公開選考を行うという、作曲賞としてはわが国で初めてのユニークな試みとなっています。

興味深いのは、公開で行われる選考会だ。

審査員がステージ上で私見を述べ、他の審査員と意見を交わしながら選考を進める。国際的にも評価されている彼らの発言は、作品のみならず音楽の本質にも触れており学ぶべき事も多い。

さて、遙か昔のことだが筆者は芥川也寸志氏にお会いしたことがある。

温厚で知的かつダンディな紳士というのが第一印象。氏は作曲家、指揮者、教育者であり、音楽番組の司会では軽妙洒落な語り口で人気があった。

また文豪の父芥川龍之介譲り? 文筆にも長け著書も多い。なかでも随想「イゴオル」は音楽教育の本質に触れた名文だろう。私がサインをお願いした著書一冊一冊に丁寧に署名されていた様子が懐かしく臉に浮かぶ。

それにしても親と子、それぞれの分野で「賞」を出せるとは、なんて素晴らしいことだろう。

増田英和(あんさんぶる編集長)